

前回、江戸時代の逃れようのない病だった疱瘡(痘瘡・天然痘)について述べた。18世紀末にイギリスのジェンナーが牛痘種痘法(人間の天然痘より軽い牛がかかる天然痘・牛痘の膿を接種して抗体を作る。；以下種痘)をあみだした。種痘は、嘉永2年(1849)7月長崎に伝えられ、11月には大坂・緒方洪庵らの適塾に届き、除痘館開設となり、さらにそこから全国に広がった。同年11月付けで発行した「除痘館 種痘引札(分苗所一覧記載)」には、「播州分」の項目に「網干 八木主三郎」の名もみえる。

明治7年(1874)網干・余子浜の中川義雄らは、西洋医学による治療と医師の養成をめざし「会社病院設立願」を提出し、開院が認められ、(のちの公立姫路病院、その後姫路赤十字病院)同年、会社病院は種痘事務の一切を任じられる。仮の種痘取締所が設けられ、以後、飾磨県における種痘の拠点となる。そして、明治13年には町村衛生委員がおかれ種痘既済未済者数把握が行われるようになった。

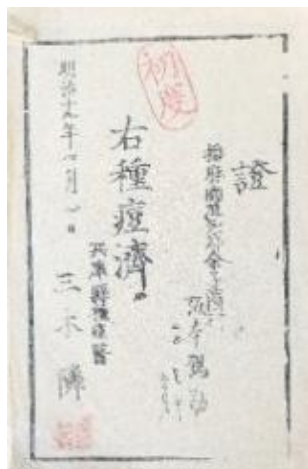
網干については、明治13年興浜・太田家の「種痘済之証」(植田実加子氏所蔵)、明治15年余子浜の「種痘済之証」(加藤隆文氏文書 姫路市立城内図書館史料整理担当所蔵)がある。余子浜の「種痘済之証」には、1歳未満から8歳代までの60人分が残っており、まず「証」と大きく書かれ、戸主の住所・名前、接種した子どもの続柄・名前・年齢などが続く。1歳未満が22人と最も多い。全てに「初度」の朱印、「右種痘済」とあり、兵庫県種痘医・三木隣による接種とされている。三木は「明治十四年三月新患者届」(加藤隆文氏文書)によると、内科・産科・眼科等幅広い分野の医業をつかさどっているが、種痘医も兼ねていたことがわかる。

この後も日本では疱瘡の流行を何度かくりかえした。昭和21年(1946)にも流行したが、種痘の緊急接種をおこなうなどして沈静化し、昭和31年以降流行は見られなくなり、51年以降種痘は行われなくなった。そして、昭和55年(1980)WHOは世界の天然痘根絶を宣言した。

網干歴史講座会員 垣内 小林淳子

参考文献；『姫路市史』第五巻上 本編 近現代 I

財団法人洪庵記念会除痘館記念資料館 『大阪の除痘館＜改訂・増補 第2版＞』



「種痘済之証」
(加藤隆文氏文書 姫路市立城内
図書館史料整理担当所蔵)



「除痘館の跡」(大阪市)